



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	匂宮三帖・宇治十帖の始発の方法：テキストに現れる / 消える光源氏(fulltext)
Author(s)	松本,直己
Citation	学芸古典文学(11): 53-69
Issue Date	2018-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/150054
Publisher	東京学芸大学国語科古典文学研究室
Rights	

匂宮三帖・宇治十帖の始発の方法

―テキストに現れる／消える光源氏―

松本直己

一、はじめに

『源氏物語』では、主人公であった光源氏の没後の世界までもが描かれている。それは匂兵部卿巻から始まる匂宮三帖、あるいは橋姫巻から宇治十帖と呼ばれるものであり、それらは紫式部によるものではないといった他作説などが説かれるところであるが、本稿はその問題に触れるものではない。この第三部と呼ばれる巻々がなぜ語られるに至ったのかを解き明かしていこうとする試みである。またその第三部の宇治の物語は正編と呼ばれる光源氏の物語が前提において存在している。そしてその正編の物語を前にして、第三部の物語はいかにしてその物語を始めるのだろうか。ここでは匂宮三帖に頻出する「光源氏」を想起させる語から、物語の始動となったエネルギー、またはそれを語る語り手の位相に注目して考察を進めていく。また橋姫巻の語りも見えていくことで、匂宮三帖との接点あるいは離反の関係を確認し、宇治十帖の始発の方法にも触れていく。

二、匂兵部卿巻―テキストに現れる「光源氏」

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そのらの御末々にありがたかりけり。遜位の帝をかけたてまつらんはかたじけなし、当代の三の宮、その同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二ところなんとどりにきよなる御名とりたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。

(匂兵部卿⑤一七)

幻巻の後、匂兵部卿巻において光源氏の死が冒頭に示される。物語は「光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり」と、光源氏という中心を失ったことを告げる。まさに「光源氏に匹敵するヒーローも、ヒロインもそこにはないのは大前提」(注一)の世界なのである。そして光源氏の後を継ぐ人物として、「当代の三の宮」(匂宮)と「その同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君」(薫)の存在が語られる。しかしこの二人ですら「いとまばゆき際にはおはせざるべし」と

語られるように物語の中心にはなりえない。「いにしへの御ひびきはひよりもややたちまさりたまへるおぼえ」といったように、薫と匂宮はつねに光源氏と相対化される存在であり、匂宮兵部卿巻は中心を欠いた世界であることが強調される。

匂宮兵部卿巻では冒頭以外にも光源氏と薫と匂宮が比較される場面が見られる。それぞれの場面を見ていくことにしよう。

昔、光る君と聞こえしは、さるまたなき御おぼえながら、そねみたまふ人うちそひ、母方の御後見などありしに、御心ざまもの深く、世の中を思しなだらしほどに、並びなき御光をまばゆからずもてしづめたまひ、つひにさるいみじき世の乱れも出で来ぬべかりしことを事なく過ぐしたまひて、後の世の御勤めもおくらかしたまはず、よろづさりげなくて、久しくのどけき御心おきてにこそありしか、この君は、まだしきに世のおぼえいと過ぎて、思ひあがりたることこよなくなどぞものしたまふ。

(匂宮兵部卿⑤二五)

光源氏と薫が比較される場面である。ここでは光源氏のおおよその生涯が書かれている。まず光源氏は「さるまたなき御おぼえ」と父桐壺帝の寵愛をうけながらも、妬む人もいて「母方の御後見なくなどありし」と桐壺の更衣の後見がなかった。しかし光源氏は思慮深く、穏やかな性格であるため「いみじき世の乱れも出で来ぬべかりしことを事なく過ぐしたまひて」と、謀反の罪に陥れられたことも穏便に済むことになった。その後は後生のために勤行などに励み、「のどけき御心おきて」な様子で構えていたとして

いる。正編を読んできた読み手にとって、この光源氏像には違和感を抱くことであろう。多くの女君と関わりを持ち、時には父桐壺帝の中宮であった藤壺と密通するなど、止めることのできない激烈な感情から皇統を犯すような過ちをするような人物であった。しかし一方で、謀反の罪をかぶせられながらも、准太政天皇という栄華を極めた理想の人物という世の中の光源氏への評価としても理解することができる。

それに対して薫は「いとこの世の人とはつくり出でざりける、仮に宿れるかとも見ゆることそひたまへり」と、この世の人のようではないとか、仏が人の姿をとっているなどと語られていく。この後に語られる薫特有の芳香も関係するのだが(注2)、それは薫自身が自分の出生の秘密に悩んでいることから起因している。

幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおぼつかなく思ひわたれど、問ふべき人もなし。宮には、事のけしきにても知りけりと思されん、かたはらいたき筋なれば、世ととも心の心にかけて、「いかなりけることには。何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」とぞ独りごたれたまひける。

おぼつかぬ誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ

答ふべき人もなし。

(匂宮兵部卿⑤二四)

薫は柏木と女三宮との密通によって生まれた子であるが、正編

においてはまだ幼いということもあるだろうが、薫がその秘密を自覚することはなかった。しかし句兵部卿巻に入ると、既に薫はどこからか自分の出生について聞いており、そのことについて悩む青年としての薫像が浮かんでくる。自分は源氏の実子ではなく、柏木の子かもしれないという出生に対する疑念を抱える人物として薫は造形されているのである。

かの過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすばほれてや、なご推しはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて、元服はものうがりたまひけれど、すまひはせず、おのづから中にもてなされて、まばゆきまで華やかなる御身の飾りも心につかずのみ、思ひしづまりたまへり。

(句兵部卿⑤二四)

出生で悩む薫は、その柏木が往生できずに宙に迷っているのではないかと思うと、来世で対面したいと思うようになり、元服するもの憂く覚えるようになる。しかし、おのづから「世の中」ではやされ、やや強引に元服の儀を行うのである。

次に句宮と光源氏が比較されている場面を見てゆこう。

かく、あやしきまで人の咎むる香にしみたまへるを、兵部卿宮なん他事よりもいどましく思して、それは、わざとよろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ(中略)いとすさまじき霜枯れのころほひまで思し棄てずなどわざとめきて、香にめづる思ひをなん立てて好ましうおはしける。かかるほどに、すこしなよびやはらぎて、

すいたる方にひかれたまへりと世の人は思ひきこえたり。昔の源氏は、すべて、かく立ててそのことと様変りしみたまへる方ぞなかりかし。

(句兵部卿⑤二七)

句宮は今上帝の三の宮であり、明石の女御腹である。この時既に兄は東宮となっており、その結婚相手は夕霧の大姫君であった。また兄の二の宮も夕霧の中姫君を結婚相手として選んでおり、句宮もその流れの通り夕霧の三の君と縁談を持ちかけられている。が、句宮は自分の気持ちにそぐわないとして、その縁談をよく思っていないかった。そんな句宮は薫の身から出る芳香に対抗心を抱き、薫物をたくことに熱中する。このような句宮の姿を世間は「すこしなよびやはらぎて、すいたる方にひかれたまへり」と、なよなよとして風流めいたものに惹かれていと思うのである。それに対し、光源氏は「昔の源氏は、すべて、かく立ててそのことと様変りしみたまへる方ぞなかりかし」と、決して一つの事柄に執着するような人ではなかったとされる。正編を読んでいる読み手はやはりこの光源氏の書かれようには違和感を感じざるを得ないのだが、一つの理想像として「光源氏」という存在がくみ取られていることには留意すべきであろう。そのことを踏まえると、「世の人」が句宮に求めるものは光源氏の後を継ぐことであり、すなわち句宮に期待をかけているのである。光源氏を望む「世の人」であるから、句宮にも少し厳しい言葉をかけるのである。

句兵部卿巻の場面をもう少し見ていこう。句兵部卿巻では他に光源氏を理想とし、その喪失を嘆く場面はほかにもある。

天の下の人、院を恋ひきこえぬなく、とにかくにつけても、**世**はただ火を消ちたるやうに、何ごともはえなき嘆きをせぬをりなかりけり。まして殿の内の人々、御方々、宮たちなどはさらにも聞こえず、限りなき御事をはさるものにて、またかの紫の御ありさまを心にしめつつ、よろづのことにつけて、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし。春の花の盛りは、げに長からぬにしも、おぼえまさるものとなん。(匂兵部卿⑤二一)

さきの二つの引用は、薫と匂宮という二人の人物との対比のために光源氏は描かれていたが、ここでは世間の人々が亡くなった光源氏を恋慕しているというのである。光源氏の死後、世の中は「ただ火を消ちたるやう」であったようである。この「火が消えるように」といった表現は『源氏物語』中では人が亡くなるときの表現として用いられ、藤壺が亡くなる際には「灯火などの消え入るやうにてはたまひぬれば」(薄雲②四四七)とあらわされている。諸注では『法華経』の釈迦入滅の記事が指摘され(注3)、その人物が惜しまれながらも亡くなったことが読み取れるだろう。ここでは光源氏の死を直接あらわしているわけではないが、光源氏の死に静まり返る様子からは、光源氏が仏のような理想の人物であったことが示されているだろう。それゆえ嘆かぬものはいないのである。

またこの場面で語られるのは光源氏だけではない。その妻であった紫の上への追憶もまた描かれている。紫の上は言わずもがな、光源氏の最愛の人であり、光源氏と同様に人々が常に思い出すような理想的な存在であった。紫の上への世間の評判が高いことは若菜下巻の上達部の言葉からもわかる。「生けるかひありつる幸ひ

人の光うしなふ日にて、雨はそぼ降るなりけり」(若菜下④二三八)というように、紫の上にも「光」という語が用いられ光源氏と肩を並べる人物であった。この場面において光源氏と共に紫の上のことも思い出されるということは、光源氏のみならず紫の上も理想の人物として世間から見られていたということだろう。

ここまで匂兵部卿巻を見てきたが、薫と匂宮が常に光源氏と比較される形で語られていること、その光源氏(または紫の上を含む)は理想の人物としてテキスト上に現れていることが見えてきた。それとともに「世」や「世の人」という語が頻出していることにも気が付くだろう。「世」の人たちは光源氏を理想化する。その理想ゆえに薫を元服させるに至ったり、匂宮に敵しい目線を送るのである。しかしそれらはある意味期待の裏返しであり、光源氏を理想としてしまうがため、薫と匂宮の二人は常に光源氏と比較される立場にあるのである。

「世」の人たちは光源氏を求め、薫と匂宮にラブコールを送り続ける。しかしそんな二人に既に諦念していたのが語り手であった。冒頭において「かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり」と、光源氏の跡を継ぐ者はいないとしていたのだった。ここに語り手と「世」の人とのズレを見ることができようが、水野雄太氏は匂兵部卿巻の光源氏像を、「光源氏の残像は、年月の経過と共に「世」にとって都合のいいように歪曲され、改変された幻想でしかない。光源氏像はいわばオリジナリティなき残像と化している」としたうえで、「世」に籠絡され、「世」にとつて都合のいい光源氏の幻想、それは語りが抱く光源氏像でもある。とすれば、「世」と語りは決して背反しているわけではなく、むしろ光源氏幻想に浸っているという点では、全く同じ立場にあ

る」(注4)と述べている。「世」と少し離れた立場に立っている
と見えた語り手であっても、「世」とともに共犯関係に立っている
のである。そしてその共犯関係のもと成り立っているのが(光源
氏)という理想像を立てることであり、それこそが匂宮三帖の原
動力となっているのだと考えられる。

語り手の位相に触れたところで、改めて薫と匂宮の造形につい
て確認したい。

匂宮と浮舟の恋には、物語社会を揺り動かす力が無に等しい。
浮舟は、八の宮の落胤ではあるものの、社会的には常陸の介
の娘として扱われていた。いっぽう匂宮は、かつて論じたよ
うに、即位の見込みをほぼ絶たれた皇子である。「受領の娘」
と「帝位に即けない皇子」。この二人が、都から離れた宇治で
愛を叫んでも、物語社会には何ほどの影響も及ばない。そし
て、浮舟に関わるもう一人の男である薫は、後述するように、
浮舟とは関わりのないところで盤石の社会的地位を築いてい
る。薫の側から見ても、浮舟との関係は、社会的に意味を持
たないまったくの「私事」なのだ(注5)。

助川氏は主人公の恋が物語の展開と結びつくものを王権物語と
し、薫は密通によって生まれるという異常出生という点において
その王権物語の主人公であるとする。しかしその異常出生に言及
すればするほど光源氏の血を受け継いでいないという欠点を抱え
ていることが露呈することになり、やはり薫も光源氏が紡いでき
た物語を背負うに足る人物ではないのである。

次代の主人公格の人々だけでは進まない物語をすすめるため、

取られたのが理想像としての(光源氏)を登場させるという手法
であった。『新編全集』は「源氏没後年月を経て、理想化が高まっ
た点もあるが、むしろ理想人喪失の実感が、この新しい物語の
背景に必要なのであろう」(注6)と指摘しているが、ここで重要
なのは死んで物語世界から離れたはずの(光源氏)がいまだテク
スト上に現れ続けているという点だろう。つまり物語の中には死
んだはずの(光源氏)が亡霊のように漂い、物語を動かすエネル
ギーにもなっているということである。世の中では(光源氏)(ま
たは紫の上)は既に理想化され、その幻影を追い続ける事しかで
きず、繰り返しにもなるが薫と匂宮は「光源氏」と比べられる存
在であり、物語を動かしていく主人公にはなりえていない。匂宮
部卿巻は(光源氏)というこの物語世界に存在しない人物をテク
スト上に表すことで原動力にし、それによって物語を進行させよ
うとする巻なのである。

しかし物語内には現れない人物を登場させるということは非常にリ
スクの高い行為でもあったはずである。『源氏物語』は物の怪が跋
扈する物語であったが、それが現れるのは部分的であり、普段は
テクストには現れない。「物語文学」というものから考えてみても、
『竹取物語』が人間と月の世界(異郷)と分けて描いて以来、見
えざるものとの緊張関係を保つことが重要であった(注7)。それ
にも拘わらず、匂宮部卿巻は本来ならばテクストに現れてはいけ
なかった「光源氏」を巻の各所に現れさせ、物語の原動力となる
という責務を負わせているのである。そのことの意味は忘れては
ならないだろう。(光源氏)という目の前にいない人物を理想化す
ることで始まった物語はどのようにして収束あるいは転換してい
くのか。その時(光源氏)という存在はどのように扱われていく

のか。そこまで視野に入れながら、以下紅梅巻・竹河巻を見ていくことにする。

三、紅梅巻―作中人物から語られる「光源氏」

そのころ、按察大納言と聞ゆるは、故致仕の大臣の二郎なり、亡せたまひにし衛門督のさしつぎよ、童よりらうらうじう、はなやかなる心ばへものしたまひし人にて、なりのぼりたまふ年月にそへて、まいていと世にあるかひあり。あらまほしうもてなし、御おぼえいとやむごとなかりけり。

(紅梅⑤三九)

匂兵部卿巻から巻を移し、ここまで語られてきた内容と少し距離を置く。それは「そのころ」から語りだされていることから明らかである(注8)。匂兵部卿巻では光源氏亡き後、その後を継ぐものとして薫や匂宮が登場することが主題であったであろうが、紅梅巻でまず語られるのは柏木の弟である按察使大納言(以下、紅梅大納言)であった。この紅梅大納言であるが、初めて物語世界に登場したのは賢木巻であった。

中将の御子の、今年はじめて殿上する、八つ九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするをうつくしびもてあそびたまふ。四の君の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、高砂を出だしてうたふいとつくし。

(賢木②一四一)

この時光源氏の目の前で「高砂」を謡った少年こそかつての紅梅大納言である。柏木の弟といった語られ方ではなく、頭中将と右大臣の四の君との子であるという登場であり、そのため世間からも重んじられていた。その後度々登場し、弁少将、左大弁と昇進し、そしてこの紅梅巻において紅梅大納言として再び登場したのである。紅梅巻の冒頭部はその紅梅大納言の半生を端的に示していると言えるだろう。

紅梅巻と匂兵部卿巻の内容が直接連続していないことには軽く触れたが、時間軸も匂兵部卿巻と直接結びついてはいない。紅梅巻の末部には「八の宮の姫君にも、御心ざし浅からで、いとしげう参で歩きたまふ」(紅梅⑤五五)と、匂宮が既に八の宮の娘のもとに通っていると語られている。これまでにそういった記述はなく、匂宮が八の宮の娘のもとを訪れるのは総角巻になってからである。年立から考えれば、匂兵部卿巻とは実に三・四年のひらきがあるのである。

しかし、年立はあくまで作中人物の年齢や出来事を基に作られたものであり、この場合でも総角巻の記述から紅梅巻を年立の上に据えたに過ぎず、『源氏物語』が桐壺巻から順に作られた、あるいは順に読み進めてくる読み手にとつては、匂兵部卿巻と何年離れているかがさほど問題ではない。匂兵部卿巻とは連続しない、異なる時間にあることが重要なのである。そして物語世界といったん切り離された紅梅巻を紡ぐ人物として登場したのが紅梅大納言なのである。以下、この紅梅大納言に注目して紅梅巻を見ていく。

紅梅大納言について、まず冒頭部分「亡せたまひにし衛門督のさしつぎよ」(傍線部)を見てみよう。「さしつぎ」とはすぐ次の意であり、ここでは柏木のすぐ次の弟であることを指している。が、直前にも「故致仕の大臣の二郎なり」とあり、紅梅大納言の致仕の大臣の次男である事が重複している。また「さしつぎよ」の箇所を「さしつぎに」とする本文もあり、その場合「はなやかなる心ばへのものしたまひし人」に接続され、柏木に次いで世評が高い人物であることを示すことになる。これらの異同及び解釈は今西祐一郎氏によって検討され、人物呼称に接続する「よ」は『源氏物語』、『紫式部日記』中に見られることから、ここで敢えて疑う必要はないと結論付けている(注9)。筆者もこの意見に従うのだが、この一文は致仕の大臣の次男であることと、柏木のすぐ次の弟であることを繰り返すことで強調していると解釈される。であるとすれば、紅梅大納言がここまで強調されながら登場してくることを考えなくてはならないだろう。

柏木が亡くなって以来、藤原氏を背負って立つ人物こそ紅梅大納言であった。柏木は朱雀院からも「才などもなく、つひには世のかためとなるべき人」(若菜上④三六)と言われたり、「官位につけてあひ頼む人々、おのづから次々に多うなりなどして」(柏木④三三四)と柏木を弔問する人が多いのは致仕の大臣の嫡男であり、いずれは藤原氏を率いる人間たりえたからであった。そんな兄が亡くなり、この紅梅大納言は兄の代わりを務めなくてはならなくなった。結果としてこの紅梅巻では大納言という兄柏木と同じ官位まで上り詰めることができたのであるが、そこには兄の代わりに家を継がなくてはならないといった家の継承意識が働いていたのであろう。つまり現在の紅梅大納言の在り方は柏木にも

ありえただろう姿であり、ここで致仕の大臣や柏木の名が上げられ、自身の家族が強調されるのは家を強く意識させる表現といえよう。

そんな官位も得ることができ、藤原氏の筆頭ともいえる立場になった紅梅大納言を中心に紅梅巻は進んでいくが、紅梅大納言が主人公として据えられているわけではない。紅梅大納言はあくまで端役にすぎず、語りが主人公として据えたいのは薫と匂宮なのである。しかしなぜ紅梅大納言が主人公となりえないのかというと、家を背負う立場の人は家門繁栄がその主眼となってしまうためであろう。その例が夕霧である。匂兵部卿巻の夕霧は既に右大臣となっており、自身の子女を次々と入内させ盤石の地位を築いている。しかし夕霧も光源氏の子でありながら、その「光」の後を継ぐ人物としては語られることはない。紅梅大納言が柏木の代わりであるとすれば、夕霧と対になるのも納得がいこう。いにせよ夕霧や紅梅大納言は家の主人であって家門繁栄がその主眼にあり、子女をいかに良い婿に嫁づかせるかを問題とするのである。そして最良の縁こそ皇室と結ぶことであり、そのため夕霧、紅梅大納言ともに匂宮に娘を差し出そうとするのである。

そんな匂宮との縁談を成就させようと必死な紅梅大納言であるが、手放しに匂宮を褒めることはない。そこには常に光源氏の影が付きまとっているのである。

「あはれ、光る源氏といはゆる御盛りの大將などにおはせしころ、童にてかやうにてまじらひ馴れきこえしこそ、世ととも恋しうはべれ。この宮たちを世人もいとことに思ひきこえ、げに人にめでられんとなりたまへる御ありさまなれど、

端が端にもおぼえたまはぬは、なほたくひあらじと思ひきこえし心のなしにやありけん。おほかたにて思ひ出でたてまつるに、胸あく世なく悲しきを、け近き人の後れたてまつりて生きめぐらふは、おぼろけに命長さならじかしとこそおぼえはべれ」など、聞こえ出でたまひて、ものあはれにすこく思ひめぐらししをれたまふ。

(紅梅⑤四八)

紅梅大納言が、子の大夫の君に光源氏のことを話す場面である。大夫の君が匂宮と慣れ親しむように、紅梅大納言も童の頃には光源氏と親しくしていた。そして「この宮たち」、つまり薫と匂宮のことであるが、二人は世間からは格別に褒められているものの、光源氏に比べてはほんの片端にも及ばないと言うのである。加えて紅梅大納言はそう思ってしまう理由についても述べている。紅梅大納言は、光源氏に比べ薫・匂宮が劣っていると思う理由について、「なほたくひあらじと思ひこえし心のなしにやありけん」と、光源氏以上の人はいるまいと思ってしまう心のためであろうか、と推測するのである。しかしこれらの発言は、何も紅梅大納言が幼少の頃から光源氏と関わりがあったから出て来たものでもないことに気づく。それは「世とともに」、「おほかたにて」(二重傍線部)からわかるとおり、紅梅大納言はあくまで世人と同じ立場にいるのである。これは匂兵部卿巻の語り手が語った内容と相違ない。光源氏を理想としながら、それに及ばないながらも薫と匂宮の二人を、光源氏に次ぐ人物として据えようとするのである。

「いかがはせん。昔の恋しき御形見にはこの宮ばかりこそは。

仏の隠れたまひけむ御なごりには、阿難が光放ちけんを、二たび出でたまへるかと思ふさかしき聖のありけるを。闇にまどふはるけ所に、聞こえをかさむかし」とて、

(紅梅⑤四八)

また、紅梅大納言は「仏の隠れたまひけむ」、「光」、「闇」といった語を用いて、光源氏亡き今、その闇を晴らす人物は匂宮しかないことを告げる。これらのレトリックもやはり匂兵部卿巻にみられたものであった。「阿難が光」は古注以来仏典が指摘されている。阿難は釈迦の十大弟子のひとりであり、仏の入滅後にこの阿難が光を放ったとされている。ここでは出典の何処を問うことはしないが、『源氏物語』では阿難が光を放ったとしても、「さかしき聖」は仏が再び現れたのかと疑う。すなわち阿難から出る光は、仏の存在がなくては成り立たないものであった。紅梅巻に戻ってみれば、仏が源氏であり阿難は匂宮という構図になるが、紅梅大納言が闇を晴らしたいと望む匂宮の光はあくまで光源氏を前提にしており、一見匂宮を賞美するような言葉でさえその実、光源氏賛美の言葉でしかないのである。

ここで見てくるのは、匂兵部卿巻の語り手と紅梅巻の紅梅大納言が「光源氏」を理想としながらも薫と匂宮をその後継ぎとするしかないという語りの位相を共にしていることである。つまり語り手と紅梅大納言が「光源氏」像をさらに印象付けているのである。ここで佐藤清隆氏は、以下のように述べる。

見方を変えていえば、「匂宮」巻の語り手と紅梅大納言の想起の言説は、じつは協働していて、理想化のこぼれを重複さ

せることで光源氏のイメージを強化しているともいえるのである。このようにして記憶の中の光源氏は無条件に賞賛されるイメージの回収されていくのである。(注10)

三田村雅子氏が述べるような「権門の親達の時間として、それぞれ別個の〈語り〉」によつて物語られる状況があると認めなければならぬ(注11)といった意見も挙げられるが、ここで注目したいのは、物語る方法として語り手と作中人物との理想像としての〈光源氏〉を作り上げるという「協働関係」が、前巻の匂兵部卿巻から継続しているという点である。未だ竹河巻を詳しく見ていないため端的にいうが、竹河巻にまで〈光源氏〉を理想とする手法は用いられている。よつて、それぞれが「別個の〈語り〉」であったとしてもなかつたとしても、物語の原動力として用いられる〈光源氏〉という手法は匂宮三帖の中で引き継がれているものだったのである。

まとめれば、匂兵部卿巻で用いられた理想像としての〈光源氏〉を挙げる手法は紅梅の巻にも引き継がれ、またその語り手は作中人物とも手を結ぶことになる。「そのころ」という語において匂兵部卿巻と紅梅巻がその物語時間を連続させないことは先にも記したが、その物語時間が連続しない中でも語り手は〈光源氏〉のイメージを強固にすべく働きかけているのである。紅梅大納言の言葉は匂兵部卿巻という巻ごとの連続性の中で見るべきなのである。そこにはやはり〈光源氏〉を物語の原動力にしていることが改めて強調されるのである。

四、竹河巻―「悪御達」の語りとその編纂者

匂兵部卿巻、紅梅巻と見てきたが、匂宮三帖末部に当たる竹河巻はどうであろうか。匂兵部卿巻が六条院すなわち光源氏家について、紅梅巻は紅梅大納言を中心とした頭中将家(左大臣家/藤原家)の動静について語ってきた。そして竹河巻は髭黒に嫁いだ玉鬘のその後を語るものであった。

また竹河巻ではしばしば語りの問題とされるのが冒頭部である。『源氏物語』の語りを考えるうえで見逃せない記述であり今までもよく研究の俎上に載せられてきたわけであるが、本稿においても匂宮三帖の語りを扱っているためやはり外せない箇所であろう。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、
いづれかはまことならむ。

(竹河⑤五九)

冒頭部において、この巻の語り手が「悪御達」と呼ばれる髭黒家に仕えた老女房であること、その「悪御達」たちが語る内容は「紫のゆかり」という光源氏に近い女房が語った内容とは似ておらず「ひが事ども」が存在すること、そしてその二つの語りを相対化する筆録・編纂者にあたる人物がいること、などがわかるだろう。が、我々は今まで読み取ってきた語り手と作中人物が共

犯関係にあるという認識を一度疑わなくてはならない。なぜならば、匂兵部卿巻・紅梅巻で語られたものは「紫のゆかり」と称される女房のもので、「悪御達」が言うにはそこには間違いがあるというのである。ここまで見てきた語りは相対化されてしまうのである。加えて、その語りを筆録・編纂する人物の提示はその両者の語りすら「どちらが正しいのか」と、さらに上の立ち位置からさらに疑いのまなざしをもたらず。このように今までの語りに疑いを余儀なくされる冒頭部であるのだが、果たして相対化するかどうかで何をもちたらすのだろうか。

古来、この冒頭部は作者別人説が指摘された箇所である。が、現在は『源氏物語』の一部として解釈する必要が説かれるようになってからは下火となったようである。「作者別人説・構想変更説への反動として以後の巻々との響き合いが強調され、『源氏物語』の一部として定位を見た後、先行部分（正編）からの連続性へと論点が移行していった」（注12）研究の流れがあるわけだが、特に「ひが事ども」が何を指すのかについては未だに一定の見解を得ていないようである。例えば星山健氏は「ひが事ども」の内容を、『花鳥余情』より説かれてきた冷泉院・薫のような不義による出生は有り得ないこととする説（注13）や、木船重昭氏はそのような出生にまつわる問題が当事者以外には漏れ得ない秘事であるとする（注14）。また山本利達氏の、夕霧の子で光源氏の孫である蔵人少将は「紫のゆかり」の語りでは「立派な人物」であったのに、竹河巻では「軽薄な人物」として描かれていることを「ひが事ども」の要因とする説もある（注15）。しかし、本稿の目的はそこではない。匂兵部卿巻、紅梅巻で理想化された〈光源氏〉が、「悪御達」が語ったとされるこの竹河巻においてどのように扱われている

くかを問題としていきたいのである。そこで、匂兵部卿巻では語り手が、紅梅巻では紅梅大納言が光源氏を称賛していたこともあるため、ここでも語り手と作中人物、特に玉鬘とに分けて竹河巻の場面を見ていこう。

①「院の御心ばへを思ひ出できこえて、慰み世なういみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも誰をかは見たてまつらむ。右大臣はことごとしき御ほどにて、ついでなき対面も難きを」などのたまひて、

（竹河⑤六四）

②大臣は、ねびまさりたまふままに、故院にいとようこそおぼえたてまつりたまへれ、この君は、似たまへるところも見えたまはぬを、けはひのいとしめやかになまめいたるもてなしぞ、かの御若盛り思ひやらるる、かうさまにおはしけんかし、など、思ひ出できこえたたまひて、うちしほれたまふ。

（竹河⑤七〇）

まずは玉鬘である。①は「尚侍の君は、婿にても見まほしく思したり」と、玉鬘が薫を婿として迎えたいと思っていることが語られたのちに、直接玉鬘が薫に向けて発した言葉である。玉鬘は光源氏の「形見」として薫を見ることがわかる。②では薫が正月に玉鬘邸に訪れた時の心内文である。夕霧は光源氏と似ているが薫は似ていないと思われている点にも注意したいが、玉鬘は「かの御若盛り思ひやらるる」と、薫を見たことのない光源氏の若い時の姿と重ねるのである。玉鬘も薫を通して〈光源氏〉を思

い起こしており、「薫を光源氏の子として高く評価することで光源氏をさらに称揚するといった役割を担っている」（注16）。

続いて語り手の方も見ていこう。

③六条院には、すべて、なほ、昔に変らず数まへきこえたまひて、亡せたまひなむ後のことども書きおきたまへる御処分の文どもに、中宮の御次に加へたてまつりたまへれば、右の大殿などは、なかなかその心ありて、さるべきをりをり訪れきこえたまふ。

（竹河⑤六〇）

④心にくき女のおはする所なれば、若き男の心づかひせぬなう、見えしらがひさまよふ中に、容貌のよさは、この立ち去らぬ藏人少将、なつかしく心恥づかしげになまめいたる方は、この四位侍従の御ありさまに似る人ぞなかりける。六条院の御けはひ近うと思ひなすが心ことなるにやあらむ、世の中におのづからもてかしづかれたまへる人なり。

（竹河⑤六四）

⑤源侍従の君をば、明け暮れ御前に召しまつはしつづ、げに、ただ昔の光る源氏の生ひ出でたまひしに劣らぬ人の御おぼえなり。

（竹河⑤九二）

③は鬚黒亡き後人々は鬚黒邸を訪れることが無くなったが、源氏の遺書には明石中宮に次いで玉鬚に対しても遺産を与えるよう

に記されてあった、とある。助川氏が「六条院の本来の伝領者より上位の資格で、源氏の財産が玉鬚にゆずられるなど、常識ではありえない事態」（注17）と述べるように不審とされてきた箇所であるが、ひとまずここでは光源氏が養女である玉鬚のために財産を残しておいたことが語られている。④は玉鬚邸にはその娘の大君と中の君がおり、若い男たちがしがきりに出入りしている中、容貌は夕霧の子の藏人少将が優れているが、優美な様子は薫が抜群であると語る。それは「六条院の御けはひ近うと思ひなす」ためであると、語り手は推察するのである。また「思ひなす」に関して、『新編全集』は「世人が薫を源氏の子であると思ひこむそのことで。しかし語り手自身は真相を知っているらしいことは、「思ひなす」の語でも知られる」と述べているが、直前に「六条院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生まれたまへりし君」とあり、語り手が薫を光源氏と女三宮との子と語っていることと齟齬がみられる。すなわちここで語り手は薫の出生の秘事について知りえてはいないということになる（注18）。そして⑤であるが、冷泉院が薫を寵愛し、その様は昔の光源氏が桐壺帝の寵を受けつつ成長したことに劣らないというのである。これも薫が光源氏の子である、という認識のもとで語られているのである。

こゝまで玉鬚、語り手が光源氏を持ち出す場面を見てきたが、竹河巻でも光源氏を理想化する動きはこれまで同様でありそうである。しかし、匂兵部卿巻・紅梅巻とはまた異なる様相も竹河巻は呈している。玉鬚は薫が光源氏とは似ていないことに気づきながらも、薫を光源氏の子と見ることでそこに（光源氏）の姿を見ようとしていた。つまり、「光源氏の存在は玉鬚の欲望に貢献する道具と化しており、同時にその欲望を韜晦させる隠れ蓑として利

用されているにすぎないのである」(注19)。そんな玉鬘に呼応するように、語り手も薫を光源氏の子としてとらえる。助川氏は玉鬘と竹河巻の語り手の関係について、「過去に向けられた玉鬘のなかば潜在的な欲望(松本注・源氏一族)として属すること)を語り手が汲み取って」(注20)いる、と述べる。ここにも作中人物と語り手の共犯関係を見ることができるとは、匂兵部卿巻が(光源氏)像を求める「世」に促され、また語り手自らも求めた(光源氏)像が、紅梅巻において紅梅大納言という作中人物と重なり合うことでその体をなしていたのに対し、竹河巻では玉鬘の欲望をくみ取る形で語り手(悪御達)が存在しているのである。

このように竹河巻でも同様の語られ方がされていることが見えにくる。しかし、その結果がどうであったかという点、必ずしも成功とはいかなかった。玉鬘の欲望のまま、あるいはその欲望をかなえるために語られ続けた竹河巻であるが、玉鬘の推し進めた大君の冷泉院参内は結果的には帝の不興を買うことになった。そして玉鬘が息子たちの昇進の遅さを嘆く場面で竹河巻は幕を閉じる。概して言えば、竹河巻とは玉鬘また玉鬘付きの女房の失敗譚とみることができる。

しかしここで忘れてはならないのは冒頭部の編纂者の存在である。この失敗譚はあくまで「悪御達」が語ったものであり、この語られた内容が本当のことだとは認めていないのである。髭黒方の女房を「悪」と称していることから、この編纂者は「紫のゆかり」であることが見えてくるのである。「紫のゆかり」とは、紫の上の女房達のことを指しており、それらは光源氏を中心とした共同体であった。ではなぜこの「紫のゆかり」に属する編纂者が髭黒家、玉鬘の失敗譚を『源氏物語』の中に並べるに至ったのかと

いうと、それはやはり(光源氏)を持ち上げる意図があつたに他ならない。

編纂者が「紫のゆかり」であるならば、髭黒家ではなく光源氏に与するのは当然であろう。つまり竹河巻で「悪御達」に語られた失敗譚はただそれだけで完結するのではなく、「紫のゆかり」に属する編纂者によつて配置されることによつて、(光源氏)の物語と相対化される関係にあるのである。それは結果として(光源氏)の理想性を強固にするものとして働くのである。

これまでのことをまとめてみよう。匂兵部卿巻では、光源氏亡き後その後継者はいないと言いつつも、薫・匂宮がその後を継ぐ人物であると語られていた。それは(光源氏)を望んでやまない「世」の要請であり、また語り手自身も二人を否定しながらも、「世」に後押しされて(光源氏)の後継者"のことを語るのである。

そこには「世」と語り手の共犯関係が見て取れる。紅梅巻では、紅梅大納言という作中人物から、匂宮を後継者と据えつつも(光源氏)にかなわないと語られる。この関係は匂兵部卿巻から継続するものであり、語り手は作中人物とも共犯関係を結んでいることになる。そして竹河巻では、「悪御達」という語り手から玉鬘の失敗譚が語られるわけであるが、それは玉鬘が光源氏とともに過ごしていた栄えある過去を望んだこと、すなわち(光源氏)の幻想を追い求めたことに端を発していた。それに応じる形で「悪御達」は竹河巻を語っており、やはり語り手と作中人物との間に強い結びつきが見て取れる。加えてその「悪御達」が語った失敗譚としての竹河巻を配置した編纂者という存在も、(光源氏)の理想性を強めるための設定であった。

語り手を中心として、作中人物や編纂者という入れ子構造の内

と外にいる人とも手を結び、理想の（光源氏）を追い求めること
で進んでいったのが句宮三帖であった。さらに安藤徹氏の「物語
社会」を考えてみれば、読者を含めた「世」が想定されることだ
ろう（注21）。つまり語り手を含めた作中人物から読み手まですべ
ての（光源氏）への欲望を原動力として句宮三帖は進んでいくの
であった。句宮三帖の始まりである「光隠れたまひにし後」（句兵
部卿⑤一七）という一節は、光源氏が既に亡くなっていたことを
示す状況を語ったはずであるのに、それは（源氏物語）にまつわ
るすべての人々の欲望を喚起し得るものだったのではないだろう
か。

五、橋姫巻―テクストから消える光源氏と宇治十帖の始発

ここまで句宮三帖の始発の方法についてみてきたわけであるが、
それを受けて続く宇治の物語はどのように進んでいくのか。宇治
十帖の始発である橋姫巻の冒頭を引用する。

そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり。母方な
どもやむごとなくものしたまひて、筋ことなるべきおぼえな
どおはしけるを、時移りて、世の中にはしたなめられたまひ
ける紛れに、なかなかいとなごりなく、御後身などももの恨
めしき心々にて、かたがたにつけて世を背き去りつつ、公私
に拠りどころなくさし放たれたたまへるやうなり。

（橋姫⑤一一七）

橋姫巻は「そのころ」から始まっており、「そのころ」が今まで

異なる時間を語りだすということは紅梅巻でふれたとおりである。
橋姫巻は句宮三帖とはまた異なった世界を語りだしているといえ
るだろう。また今後読み進めていくうちに宇治十帖と句宮三帖の
時間軸が重なっていくことに気が付くことになるだろうが、ひと
まずここでは句宮三帖とは切り離された世界が語られると考えた
ほうがよいだろう。

そこで登場するのが「世に数まへられたまはぬ古宮」である。
この「古宮」というのは、母方の身分も申し分なく、立坊・即位
すら騒がれていた。しかし時勢が変わると世間から冷遇されるよ
うになり、後見たちにも愛想をつかさされ、どこにも頼るところも
ない有様であった。

またこの「古宮」の準拠として、注釈においても『花鳥余情』
では菟道稚郎子、『源氏物語玉の小櫛』では惟喬親王を挙げている。
その他人物を上げれば枚挙に暇がないが、この冒頭部は実際に存
在した人物のイメージと重なり、政治的な敗者としての側面を強
烈に喚起させる。

ところで、（光源氏）を求める欲望はこの「古宮」にも向けられ
ることだろう。しかし薫のように体から芳香が漂うといった超常
的な現象が語られるでもなく、かといって政治の中心となってい
た人であるかと言われれば否である。言い換えれば、語り手が光
源氏と比べる前からこの「古宮」が光源氏に次ぐ主人公でないこ
とは明らかなのである。（光源氏）を求める欲望はここでその対象
を見失い、宙に浮いたままになるだろう。そうであるとするなら
ば、（光源氏）はさておき、この「古宮」の物語を追うことになる
のである。

かかる絆にもかかづらふだに思ひの外に口惜しう、わが心ながらもかなはざりける契りと思ゆるを、まいて、何にか世の人めいて今さらにとのみ、年月にそへて世の中を思し離れつつ、心ばかりは聖になりはてたまひて、故君の亡せたまひにしこなたは、例の人のさまなる心ばへなど戯れにても思し出でたまはざりけり。

(橋姫⑤一二二)

その宙づりになつた欲望は「世」の語からも見えてくる。「世に数まへられたまはぬ」と、登場の場面から「世」から疎外されたことが語られていた。またその「古宮」自身も「世の中を思し離れつつ」と、世間から自分は相容れないものと自らを「世」から疎外している。すなわち「古宮」は「世」との関わりを絶つた人物なのである。そして「世」とは言わずもがな(光源氏)を欲望してやまない「世」のことである。橋姫巻は今まで語られてきた「世」とは連結しない「古宮」について語っており、(光源氏)を理想とする物語は一旦収束していくのである。

源氏の大殿の御弟、八の宮とぞ聞こえしを、冷泉院の春宮におはしましし時、朱雀院の太后の横さまに思しかまへて、この宮を世の中に立ち継ぎたまふべく、わが御時、もてかしくきたてまつりたまひける騒ぎに、あいなく、あなたさまの御仲らひにはさし放たれたまひにければ、いよいよかの御次々になりはてぬる世にて、えまじらひたまはず、また、この年ごろ、かかる聖になりはてて、今は限りとよろづを思し棄てたり。

(橋姫⑤一二五)

いといたう色めきたまうて、通ひたまふ所多く、八の宮の姫君にも、御心ざし浅からで、いとしげう参で歩きたまふ、頼もしげなき御心の、あだあだしさなどを、いとどつつましければ、

(紅梅⑤五五)

「古宮」は北の方が亡くなり、その形見となつた二人の娘たちと余生を送っていたと語られたのちの場面の引用であるが、(光源氏)の「世」と交わることのなかつた「古宮」の物語は、突如として正編の物語、先に語られていた匂宮三帖と連結する。この「古宮」は光源氏の弟であり、桐壺帝の八の宮であつた。「八の宮」という呼称、その姫君の存在は既に紅梅巻において語られていたのであつた。この八の宮は冷泉院がまだ東宮であつた時に、冷泉院に対抗するため弘徽殿女御によって擁立させられた人物であつたことが橋姫巻において明かされるのである。このことが賢木巻から須磨巻にかけてのことだと思ひ浮かべることは、正編を読んでいれば容易なことであろう。しかし『源氏物語』正編には一切語られていないことであつた。「古宮」の物語とは、光源氏の物語の裏側にあり、そこでは語りえなかつた物語なのである。橋姫巻になつて語られる真実は(光源氏)を相対化するわけであり、「世」から離れた「古宮」の物語は(光源氏)を理想とすることはなく、物語は光源氏の物語と連結するもののその欲望も意味をなさない。かつて「世」につき動かされるように(光源氏)を語っていた語り手も、ここではその裏側に存在していた八の宮の物語を語るこ

とに徹している。匂宮三帖において原動力であった〈光源氏〉幻想と距離を置くことで、新たな物語を紡ぎ始めるのである。つまり〈光源氏〉をテクストから消し、裏切ることが宇治十帖の始発の方法であったのである。

六、おわりに

匂宮三帖は作中人物から読み手に至るまでのあらゆる人々の、〈光源氏〉を求める欲望が物語を進める原動力となっていた。そして宇治十帖になると「古宮」という新たな人物が登場し、その欲望は行き場を失い、収束を迎える。結果として残されたのは「かの御次々になりはてぬる世」、つまり薫と匂宮の「世」であり、既に〈光源氏〉という中心を失いながらもその残滓の物語を続けるほかないのである。その宇治の世界においては〈光源氏〉は後景化しているのである。最後にそのことがわかる一節を引用してみる。

尼君、「光る君と聞こえけん故院の御ありさまには、え並びたまはじとおぼゆるを、ただ今の世に、この御族ぞめでられたまふなる。右の大殿と」とのたまへば、

(手習⑥三五九)

これは小野の庵の尼君の言葉であるが、「光る君」という言葉が見える。理想の人として〈光源氏〉を挙げているが、この尼君は「ほけほけしきさま」(手習⑥三五七)と言われるほど既に老いていて、昔の光源氏の姿を知るものはほとんどいないのである。作

中人物レベルで〈光源氏〉が引き合いに出されることはあっても、それが語り手や「世」と結びつくことはない。宇治十帖の世界は〈光源氏〉から放たれた世界を語っているのである。それゆえ中心は存在せず、ただ薫や匂宮といった人物が何に対しても影響を与えることはなく、ただ自転を繰り返すだけなのである。

※『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)『新編全集』に拠り、○内に巻名・『新全集』巻数・頁数を附した。なお、本文には適宜傍線などを附した。

注

(1) 助川幸逸郎「誤読」される宇治十帖―平安後期物語との〈取り違え〉をめぐる―(『日本文学』五十七巻五号、二〇〇八年)

(2) 「香のかうばしきぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たりたるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。」(匂宮部卿⑤二六)

(3) 「仏此ノ夜滅度ス。薪尽キ火滅スルガ如シ。諸ロノ舍利ヲ分布シテ無量ノ塔ヲ起ス」(『新編全集 源氏物語⑤』「漢籍・史書・仏典引用一覧」)。古注ではすでに「河海抄」が指摘している。

(4) 水野雄太「源氏物語」第三部始動の論理―匂宮部卿巻における光源氏の残像・「世」・語り―(『学芸古典文学』八号、二〇一五年三月)

(5) 注1に同じ。なお助川氏の論は匂宮部卿巻だけを扱ったものではなく第三部全体を踏まえた論である。しかし人物造型という点においては共有しうるものであるため、ここに挙げた。

(6) 「匂兵部卿⑤二八」 頭注

(7) 「物語」、「物語文学」については多くの指摘があるが、ここでは土方洋一氏の論考を挙げておく。

人々が心という自らの裡なる未知のもの、自らの裡なる異郷を抱えこんだ時、古代的な異郷意識に決定的な変化が起こったのだと考えられる。はるか彼方にある異郷は断念されたのではなく、自らの裡なる異郷のもう一つ外側へ棚上げされたのだ。遙か彼方にある異郷との間に、恐ろしいまでの緊張関係を持続しながら、それは書く表現の外側に構造化しておいで、書く表現を通しては、人間の裡にある未知なるものの追求に向かいはじめる、それが物語文学の表現の位相なのであった。

〔土方洋一「仮名物語の想像力・覚え書」、『物語史の解析学』風間書房、二〇〇四年〕

(8) 吉海直人「続編巻頭の「その頃」」(鈴木一雄監修／雨海博洋編『源氏物語の鑑賞と基礎知識4 橋姫』至文堂、一九九三年。

初出は『源氏物語研究(而立編)』影月堂文庫、一九八三年)、上野辰義「『そのころ』で書き起こされる源氏物語の巻頭について」(『国語国文』第五四巻一、一九八五年一月)など。

(9) 今西祐一郎「『衛門督のさしつぎよ』考」『源氏物語』紅梅巻の一文―(『語文研究』第九一巻、二〇〇一年六月)

(10) 佐藤清隆「『源氏物語』続篇の光源氏 死者として存在する光源氏」(『国際文化研究紀要』第十三巻、二〇〇六年十二月)

(11) 三田村雅子「第三部発端の構造―(語り)の多層性と姉妹物語―」(『源氏物語 感覚の論理』有精堂出版、一九九六年)

(12) 星山健「匂宮三帖の世界 竹河巻を中心に」(関根賢司編『源

氏物語 宇治十帖の企て』おうふう、二〇〇五年)。星山氏は九つの先行研究を挙げて、研究史を概観している。作者別人説を紹介するものはここでは省略するが、その転換点となった論として池田和臣氏の「竹河巻と橋姫物語史論―竹河巻の構造的意義と表現方法」(『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書房、二〇〇一年)を挙げる。池田氏の論から匂宮三帖と宇治十帖との連関が説かれるようになり、神野藤昭夫「紅梅巻の機能と物語の構造―『源氏物語』宇治の物語論のための断章―」(『源氏物語とその前後』桜楓社、一九八六年)、原陽子「紅梅巻と宇治十帖―宇治十帖後半の論理に果たす紅梅巻の機能―」(『中古文学』四八号、一九九一年一月)に引き継がれた。これらにより匂宮三帖が『源氏物語』の一部として定着するようになり、今度は正編との関わりを見直す論が出されるようになった。ここでは神田龍身「匂宮三帖の再評価―王朝時代への挽歌」(高橋亨・久保朝孝編『新講 源氏物語を学ぶ人のために』世界思想社、一九九五年)、陣野英則「光源氏の物語」としての「匂宮三帖」―「光隠れたまひにしのち」の世界―(『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版、二〇〇四年)が挙げられている。

(13) 前掲注12。星山論文より。

(14) 木船重昭「宇治への道―その開鑿の方法と世界―」(『日本大学』第二四巻第一号、一九七五年一月)

(15) 山本利達「悪御達の問わず語り」(『滋賀大國文』三十一号、一九九三年六月)

(16) 前掲注12。陣野論文より。

(17) 助川幸逸郎「竹河巻のアイロニー―『源氏物語』における(他氏排斥)の方法―」(『中古文学論攷』一二号、一九九一年三月)

- (18) 前掲注12。星野論文より。
- (19) 前掲注10。なお傍点は原文による。
- (20) 前掲注17。助川氏はこの論のまとめとして、「竹河巻の編集者は、光源氏方の女房であるに違いない」とし、その「編纂者」は失敗譚を語る理由として、その編纂者が髭黒家を陥れる「(他氏排斥)」であったと結論付けている。
- (21) 安藤徹『源氏物語と物語社会』(森話社、二〇〇六年)

(まつもと・なおき／東京学芸大学大学院修士課程)